

第四十八回中央教化研究会議 基調報告

三大誓願に生きる 石橋湛山の信仰

三 原 正 資

おはようございます。本日は、第四十八回中央教化研究会議に、全国七三管区の方々には、ご参加いただき、心より御礼申し上げます。

さて、本日、皆様の中で石橋湛山をよくご存知の方は、さほど多くはないと思います。

四八年前の昭和四二年（一九六七）、私が立正大学へ入学したとき、学長は石橋湛山でしたが、お姿を見ることもなく、その後、私も完全に忘却しておりました。

ところが、平成二五年の正月、ある喫茶店で手にとった雑誌『サライ』に掲載された、作家・井出孫六氏のインタビューの中で、石橋湛山の小日本主義が紹介され、感銘をうけ、湛山を調べようになりました。

また、昨春秋、開催された法華経・日蓮聖人・教団論セミナーで、片山善博先生が、「今、最も注目すべき人は、石橋湛山です」と発言したことが、耳に残っています。

さて、『石橋湛山』（吉川弘文館 二〇一四年）という評伝の中で、著者姜克實ジャンクイシ氏は、彼の生涯を次のように要約しています。

石橋湛山は、明治・大正・昭和の三つの時代にわたって活躍した言論人・政治家・思想家であり、戦前では植民地放棄論、小国主義を唱えた異色の経済ジャーナリストであった。戦後、政界に転身して第一次吉田内閣の大蔵大臣を務め、独立後、鳩山（一郎）内閣の通産大臣を三回連続して経験し、保守合同の後、自由民主党第二代目の総裁、第五代内閣総理大臣まで登りつめた人物である。

〔湛山と三大誓願〕

湛山は、身延山久遠寺第八一代法主となった杉田日布の長男として生まれ、戦後は、長く第一六代立正大学学長を務めました。

ところで、姜克實氏ジヤククワンは著書『石橋湛山』の巻頭に湛山が山梨県立第一中学校時代の一七歳のとき、級友荒井金造に贈った、『開目抄』の一節、その写真を掲載しています。

善に付け悪につけ法華経をすつる、地獄の業なるべし。本願を立つ。日本国の位をゆづらむ、法華経をすて、観経等について後生をごせよ。父母の頸をはねん刎、念佛申さずわ。なんどの種々の大難出来すとも、智者に我義やぶられずば用いじとなり。其外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ、等と誓ひし願、やぶるべからず。（『定遺』六〇一頁）

湛山はこの『開目抄』の三大誓願の一節を引用して、校友会雑誌に「消夏随筆」（浅川保『石橋湛山』山梨日日新聞社 二〇〇八年）を書き、

吾れは、斯の様に血と涙とを以て、国のために尽す様な人物を是非現今日本の社会に欲しい。宗教界にせよ、政治界にせよ。

と述べています。この文章には、のちの湛山の人生が暗示されているようです。

湛山の言論、行動を支えたものは、この『開目抄』の一節に代表される、日蓮聖人への信仰でありました。この中央教団では、戦前、戦中、戦後を歩んだ、湛山の思想と行動を学び、戦後七〇年の意味を考え、皆様が御降誕八〇〇年へ向う「立正安国・お題目結縁運動」に取り組むことを願っています。

本宗は戦前は国家と一体化した日蓮主義、戦後は国家と距離をおき、もっぱら国家を批判する立場が目立っていたと思います。今日はどうでしょうか。

佐藤弘夫氏は、「国家という問題と日蓮」(『春秋』二〇一五年六月号)という論稿の中で次のように述べています。

日蓮は一方では宗教者として、現世を超えた、究極の理想世界を見つめていた。その一方で、卓越したりアリストであった日蓮は、その理想を実現する上で、現世の政治権力が、果たすべき役割と、その重要性を、はっきりと認識していた。

立正安国、すなわち宗教と国家、というテーマで、私たち日蓮宗教師の立場を考えるために、石橋湛山という人への指標はないのでしょうか。

渡邊宝陽先生は、石橋湛山記念財団が発行した『自由思想』(第三八号 昭和六一年)の中で、「石橋湛山の宗教観

の一端と法縁の周辺」と題し、湛山の兄弟子・藤井日静（湛山は望月日謙を師として出家している）が発行した願満寺寺報『願満』（昭和二十七年）に掲載された「意志の固い日蓮聖人」を引用して次のように述べています。

書き出しは極めて率直に、「私は、大蔵大臣在任中、非常に心臓の強い人間だという評判を取った。しかし、私自身は省みて少しも心臓が強いとは感じていない。それどころか反対に、はなはだ気が弱くハニカミやで、常にこれではならぬと思っているほどである。いったいこれは、どちらがほんとうか。そこで私は、ふと宗祖大聖人のことを回想したのである」と述べられている。

この文章につづいて、湛山は「私のごとき凡愚をもって、宗祖に比すなどとは、飛んでもないことだが……」と述べていますが、渡邊先生は、これは「湛山が日蓮の生き方に自分の生き方を重ねているのである。さらに言えば、そこに湛山の自負が見えてくるのである」としています。

さて、次の一節が大事です。

日蓮聖人の意思の堅さは、「単に、いわゆる強情我慢とか戦闘的とか、心臓が強かった」というのではなく、「鍛えに鍛えた思索の結果到来した結論」であった……。

すなわち、『開目抄』一節中の「智者に我が義破られずば用いじとなり」の一文が大きな意味をもってくるのです。渡邊先生は、さらに「極めて大胆率直な信仰告白ともいえるべき」湛山の文章を紹介しています。

「私が心臓の強い男といわれたのもまことに倫を失した申し条だが、いささか、これに類するのである。私は、自ら研究し、正しいと信ずる主張を述べるのに遠慮はなかった。それは、いわゆる心臓のゆえではない。理論の背景があったからである。日蓮門下の末席をけがす一人として今後私は、これでゆこうと思う。そして及ばずながらも日本の柱となり、日本の眼目となり、日本の大船にならんと志すものである。」

日蓮聖人の三大誓願と、その一節を、湛山はジャーナリストとして、あるいは政治家としての信条としていたことを知ることができます。

〔湛山の日々〕

さて、湛山の日々を日記から見たいと思います。

〔『石橋湛山日記』上 みずず書房 二〇〇一年〕

昭和二十年一月十一日（木）

（経済）倶楽部午餐会さん第一回。恒例に依り予講演。予の戦後世界平和案を発表す（演題 昭和二十年の課題）

同 一月二十三日（火）

芝宅にて十時より和彦葬儀を営む。導師望月日雄師（東京日暮里善性寺住職）、杉田湛正（末弟、静岡県富士宮市一乗寺住職）、黒澤俊章（小田原蓮船寺住職）両師亦参加

同 三月十日（土）

今晚B29の来襲に依り芝宅全焼す

同 八月十五日（水）

本日正午、天皇の玉音に依って停戦発表

同 八月十八日（土）

考えて見るに、予は或意味に於て、日本の真の発展の爲めに、米英等と共に日本内部の逆悪と戦つてゐたのであつた。今回の敗戦が何ら予に悲しみをもたらさざる所以である。

昭和十九年、次男和彦を戦争で失い、また東京大空襲で自宅を焼失するという苦悩の中で、六一歳の湛山は敗戦八ヶ月前には「戦後世界平和案」を発表し、国の将来を思う情熱はおとろえていません。彼の姿勢がよく示されたのが、玉音放送三日後の日記です。

いわゆる戦後の価値観の中で育ち、それしか知らない私にとって、戦前、戦中、戦後を通してリベラルな考え方を強靱にもちつづけた湛山の姿は実に新鮮です。

連合国総司令部・GHQは、昭和二〇年から二七年まで日本を占領・統治し、その間湛山は公職追放されました。日本がマッカーサー礼賛に満ちていた中で、日記に残した彼の発言はさわやかです。

昭和二十六年四月十六日（月）晴

今朝マッカーサー元帥日本を引上げ帰米す、見送り盛んなり、かれは世界で最もキザな男なれど。

さて、昭和二十七年（一九五二）、立教開宗七百年、湛山六八歳の日記を見ましよう。

昭和二十七年三月二十日（木）晴

帰宅七時すぎ、日蓮上人開宗七百年記念講演につき考案。

同 三月三十日（日）晴

午後一時より駿河国日蓮宗寺院主催、開宗七百年慶讃大会（静岡市公会堂）にて講演、予は二時すぎより三時半まで。右席にて北山本山片山師の講演を聞く、大いによろし

この後、四月六日に由比町正法寺、四月一四日に北山本門寺、四月二〇日に浜松・袋井劇場、五月一七日に鎌倉妙本寺と、精力的に開宗七〇〇年慶讃講演をする様子が記されています。

では、昭和三十一年一二月、湛山が岸信介を破り、首相に就任した前後の日記を見ましよう。

昭和三十一年十月九日（火）曇

午後一時米大使館にてダレス米情報局長官の歓迎会を開く。

午後三時半すぎ、列車にて身延に向う、富士白衣荘に泊。土地の連中大いに来る。

同 十月十日（水）晴

朝自動車にて富士出発。身延に十時すぎ着、山田屋に休息、軽装して山上慕参。一たん山田屋に戻りて昼食、本

院に赴き深見法主米寿祝賀会に参列す。

湛山がアメリカ大使館のダレス歓迎会に出席し、その会場から身延へ向かうところに、かつて「国のために尽す（略）宗教界にせよ、政治界にせよ」と述べた湛山の面目躍如の様子をうかがえます。

年が明けた昭和三十二年一月四日、首相になった湛山は伊勢へ出発、一月五日、内外宮に参拝して静岡へ戻ります。

昭和三十二年一月六日（日）晴

朝早く水口屋発。身延に参拝、権大僧正に叙せらる。法主より法衣を贈らる。

同 一月十二日（土）晴

昨夜十一日大阪より急行玄海にて福岡に赴き、十一時五十分着。

歓迎盛んなり。演説会に出演、その外、東公園にて日蓮上人銅像参拝、日蓮宗寺院及び信徒の歓迎を受く……

同 一月十六日（水）晴

十時官邸にてアリソン氏と会見、全氏離任のあいさつ。合せて防衛予算につき米側見解の開陳あり、趣旨において私に異議なしと答う。それより前、九時、防衛庁において中国軍事部の来訪を受く。

午後一時、岸外務、池田大蔵両相と防衛問題にて打合せ。……

同 一月十七日（木）晴

…十一時、立正大学にて大学及び日蓮宗連合の祝賀会（私のため）出席。夜、東京知事会合。

首相としての苛酷な毎日、その中をぬって身延山や博多の宗祖銅像へお参りしているところに誠実な信仰者湛山の姿を見ることができません。

〔平和への願い〕

ここで湛山のもの考え方を紹介します。

二年ほど前、早川誠先生（立正大学法学部教授）から「現代から見る石橋湛山」という講演を拝聴しました。その中で先生は湛山の考え方を次のように述べられました。

石橋湛山は戦後一時期は、日本は再武装したほうがいいという議論を出しているわけです。これは石橋先生が平和主義者だったという視点からすると、「そのとき、石橋先生はおかしかったんだよ」という議論になってしまいますが、私はそうではないと思います。石橋先生は現実の中で、「軍がここはどうしても必要だな」とその時は考えたのではないか（略）

まず現実を見る。その現実の中で、どうしたら人々が幸せになるかということがまず最優先である。

現実の中で、いかに理想を実現するかという湛山の考え方がよく示されていると思います。

ところで、これは日蓮聖人の『上野殿御返事』の次のことばに通じているのではないのでしょうか。

ほとけにやすくとなる事の候ぞ。をしへまいらせ候はん。人のものををしふると申すは、車のおも（重）けれども油をぬればまわり、ふね（船）を水にうかべてゆきやすきやうにをしへ候なり。仏になりやすき事は別のやうは候はず。早魃にかわ（渴）けるものに水をあたへ、寒氷にここへ（凍）たるものに火をあたふるがごとし。又、二つなき物を人にあたへ、命のたゆるに人のせ（施）にあふがごとし。（『定遺』一八二八頁）

この御遺文にてらすと、政治家湛山の日々は、自身述べているように「日蓮門下の末席をけがす一人として」、日本の柱となつて、人びとに幸せをもたらす仏道の歩みであつたととらえることもできます。

首相を辞任した後、湛山の平和への思いは深まり、湛山は日米安保体制に代わる新しい体制―日中米ソ平和同盟を構想します。

今や世界は未曾有の危機に瀕し、一朝誤れば、人類破滅の悲惨さえ生ずるかにいわれております。この事態を救うものは、世界を一仏土にする平和の教えのほかにはあるまいと思ひます。

立正大学には、湛山が揮毫した「東西無礙如一家」の書があります。この法華経が説く真理に立ち、それをめざしての

思想は常に修正すべきもの、修正されていかなければならぬものだ。

という湛山のジャーナリスト、政治家としての多様な活動は妙用方便と考えることができます。こうして、湛山は、戦前、戦中、戦後、世の流れに抗して世界を一仏土にする理想の実現のために生きたということができません。

すべての国に対し、謙虚な気持ちをもって、相手国の立場を理解する努力を怠ってはならぬ。

湛山は日蓮聖人御遺文と若いときから親しんだ聖書を身近においていたといわれますが、このことは今日、ナシヨナリズムと狂信的宗教が現代世界の混乱の原因となっているのを見るにつけても、彼がこれを超えようとしていた、と見ることができないのではないのでしょうか。さて、石橋湛山は、この一五〇年間、日本がひたすら人口増大・経済成長する中を生きた人でした。しかし、二〇〇八年わが国は始めて、人口減少・縮小社会を迎えました。積極的経済論者・湛山に学ぶものはあるのかと思われるかもしれませんが。しかし、戦前の日本が植民地を拡大し大国主義に走っていたときに、データを駆使して植民地放棄・小国主義の方が経済効率的であると異端の言説を説いた人です。

湛山の考え方・生き方の中には、今日を生きるスキルが隠されているのではないのでしょうか。縮小社会・小国日本の柱となる生き方を学びたいものです。

〔湛山の人柄〕

ところで、昭和三四年に中央公論社から創刊された『週刊公論』創刊号巻頭グラビアに湛山が取りあげられています。国民の湛山への高い評価と親近感に溢れ、戦中、戦後の湛山の行動が分かりやすく示されています。（記事を掲載しておきます。あとでお読みください。）

戦後の八人の首相のなかで、誰が一人人気があったかという判定は、これでなかなかむずかしい。だがタクシ一の運ちゃんも床屋のおやじさんも口をそろえて「石橋さんは立派だよ。退き際もよかったしもつとやっってもらいたかったねえ」という。日本人は案外がんこ者がすきである。ことに一国の総理となると、ソツのない八方美人を重

んじない。石橋さんの人気も、あの清潔な出所進退と「百万人といえども我ゆかん」のがんこな信念にゆらいずることはいうまでもない。

戦争中の石橋さんも見事だった。社長をしていた「東洋経済新報」は、自由主義を捨てなかったために、ひどく軍部にいらまれた。節をまげて軍部に協力しようという動きが社会になかったわけではない。だが「自由主義の伝統を捨てて迎合するくらいなら、自爆して亡びたほうがよい」と石橋さんは反対した。この土性骨は、なんといっても政治家湛山の貴重な財産であろう。

石橋さんは第一次吉田内閣の蔵相の頃、終戦処理費をけずることを主張してGHQにきらわれ、いわれない追放の憂き目をみた。当時飛ぶ鳥をおとすいきおいの占領軍に日本人として最初の抵抗をこころみたのが石橋さんである。それだけに中国を訪問して周恩来のペースに乗せられたという岸派のPRは、よほど彼のカンにさわっているようだ。

石橋さんが美術展に日蓮の肖像画をみにいった。制作者は独立美術の野口弥太郎氏、数年前に石橋さんに頼まれたのが、やっと出来上ったのだ。この日、権大僧正の湛山和尚は宗祖日蓮と対面して、麗らかな御機嫌だったが、日蓮のふとい眉、しまった口もととは湛山和尚と瓜ふたつだ。絵筆をとる画伯の眼底に石橋さんの面影がちらつかなかったとはいきれまい。会場には抽象画がところせまく並んでいたが、以下は石橋さんとの一問一答。「抽象画は？」「わからんねえ。だが色はきれいだ」「好きな色は？」「僕は赤だね。だが赤一色はいかん。赤とほかの色がまじっているのがよい」

この問答に象徴的な意味を見つけるのは、コジつけというものだろう。だが、目下、石橋さんは岸さんの外交政策にサジを投げ、保守党の脱皮をつよく望んでいる。自民党の左、社会党の右、いわば進歩的保守党の線だ。石橋さんの健康もひと頃より大分いい。日蓮は「われ国の柱たらん」と叫んだが、石橋さんもこの意気込みでやっても

らいたい。

〔『週刊公論』創刊号「石橋湛山——明治が培ったこの叛骨——」中央公論社 昭和三四年〕

さて、現在、多くの人びとは、先の見えない不安定な社会の中で、もう少しは安心できる生活をしたいと切実に思っています。宗祖の立正安国のお考えをもとに、お題目結縁運動を推進している皆様には、今回、石橋湛山の思想と行動を学び、社会の人びととともに安穩な社会を実現していただきたいと思えます。

今日と明日の二日間、各部会において活発な討議が行なわれることをお願いして、基調報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。